

# いのちの水

二〇一九年

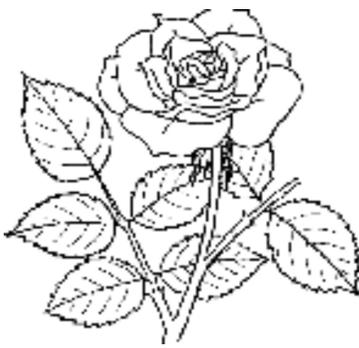
七月号

七〇一号

とこしえの山々は砕かれ、永遠の丘は沈む。  
しかし、主の道は永遠に変わらない。(旧約聖書 ハバクク書3の6)

## 目次

- ・ 神と自然と人間と 1
- ・ 開かれた目と耳ーハンセン病の玉木愛子について2
- ・ メルケル首相の信仰 5
- ・ 正義の支配ー詩編72 7
- ・ 「いのちの水」誌700号に寄せて(その2) 12
- ・ 「アルプスのハイジ」 18



## 神と自然と人間と

神は沈黙していて、私たちへの語りかけなどまったくしていないように見える。

これは自然の世界を見ても同様である。

青く広がる大空や、白い雲、また花々、樹木たち：それらが人間に語りかけているなど、思いもしない、そんなことはありえないと思っている人が多数を占めるであろう。

しかし、神は単なる沈黙でなく、待っておられるのである。

そして神の愛の産物である自然もまた、私たちが周囲のさまざまな自然に心を開き、聞き取ろうとするのを待っている。

もともと神は愛であるゆえ、私たちを見つめてくださっている。それゆえ、私たちもそれに応えて、幼な子のような心もて神を見つめようとするとき、また、そのような心で自然を見つめるとき、神が私たちに語りかけておられるのが少しずつではあっても感じられてくる。

主イエスも、「私にとどまっていなさい、私もあなたの方のうちにとどまっている」(ヨハネ15の4)と言われた。

万物はキリストによらずに成ったものは何一つない。(ヨハネ福音書1の) という言葉がある。

自然もまた、愛のキリストに

よる創造だということは、科学やその他の学問によらず、神からの一方的な啓示による。インスピレーションという言葉がある。スピリット(霊)がインー入ってくるということである。神からの聖霊によって考えたこともないこと、あるいは論理や科学などでは考えられないことが、閃光のように入ってくることもある。

そのとき、風のそよぎや木々の葉の生み出す音も神からの意味深いメッセージとなる。空の星のまたたく光も、また木星や金星、火星などの惑星のじつと見つめるような強い光も、みなそれぞれに言葉にならない言葉を語りかけてくる。

だれでも、音楽や、美しい光景、あるいは人間からの真実な愛を受けたときの感動というものは、言葉ではほんのわずかしが表せないということを知っているであろう。

自然もまた、愛のキリストに

心に感じて動かされること、それはいくらでも周囲に広がっている。私たちの心がそうしたものに敏感になればなるほど、そうなる。

昆虫たちのなかには、驚くべき能力をもっているのがいくらでもある。到底、機器類では検知不可能な、極めて微量の物質を検知して相手を引き寄せるのである。小型のチャバネゴキブリでの研究があり、雌が放出するわずか1億分の1〜100億分の1グラムといった極微量の化学物質が雄を引き寄せるといふ。

人間にとって単なる害虫とか何の役にも立たないような蛾であっても、信じがたいような鋭敏な感覚が与えられている。

そうしたことから考えても、人間の霊的感覚というべきものは、本来は非常に深く、無限の変化に富んだものとして与えられているであろう。

ちよつとしたひと言、あるいは一瞬のまなざしによつても、霊的な感覚の鋭い魂において、深く広い内容を感じ取る。聖霊がすべてのことを教えると言われるのも、鈍感な人間であつても聖霊が注がれるときには、その人は、遠くのこ

と、他の人の心のなかで生じること等々、以前はまったくわからなかつたことが、示されてくるからである。

日々の沈黙は、また雄弁となる。

苦難によつて開かれた目、耳

神は、私たちを動物の持っている自然のままの目や耳からさらに、人間だけが持つことのできる、霊的な目と耳を開こうとされ、そのゆえにさまざまな苦しみや悲しみも与えられる。

年若くして「比類なき困難」に置かれつつも、神の愛に触れて霊の目が開かれていった人の魂の世界の一部を紹介したい。

一人の重き荷を負いつつ、文字通りの暗黒の生活のなかで信仰に生き抜いた一人の女性が

その人、玉木愛子は、1887年、大阪の豊かな商家に生まれながら、子供のときにその商家に働いていた人からハンセン病に感染したのだ。

14歳のときに身体検査のとき、病気の兆候が現れていたのを医者が認め、以後は、家族に迷惑をかけることを恐れ、また家族もそのことを望んだために、学校にも行くことを止め、部屋にこもりきりの生活となった。

母親は、学校や訪れる者には、遠いところに行つていと偽

りを言つて帰つてもらうという状態となった。玉木は、自分には要らない存在なのだ、と毎日部屋に隠れるようにして生きていかねばならない深い悲しみと絶望感にさいなまれていった。その時の深い衝撃は次の俳句に示されている。

病名のかなしや 秋日がたと落つ

ハンセン病といえ、歴史的にもつとも恐るべき病気であつた。今から130年ほど昔(1889年)に、フランスの宣教師テストウイードによつて、静岡県御殿場に初めて専門の治療所(神山復生病院)が開設された。

その後、イギリスの宣教師、ハンナ・リデルが1895年熊本に回春病院を作り、後に政治家や渋沢栄一とのつながりも与えられ、以後、ハンセン病の治療に世間の目を向け

させることに大きな影響を与え、各地にハンセン病院が開設されていくことにつながった。

この病気になると、次第に全身が侵され、家族からも捨てられ、寺社の境内や小屋、あるいは橋の下にて生きていかねばならなくなり、食べることもままならず、雨風に打たれ、冬の寒さに凍えつつ、それらに苦しみつつ、最終的には、顔かたちも直視できないほどに変貌し、顔を布で包んで隠し、四国では88カ所めぐりを食物を乞いながら遠い距離を歩いていくうち病気が進行し、ついには恐ろしい痛みや苦しみ、孤独のなかで死んでいくという悲惨な状況だった。

そのようななかから、熊本の回春病院の存在を知り、家を出ることに決断、そこでの生活が始まるが、次第に病気は進行し、最終的には、両眼は失明、両足まで切断という事態となった。

そのハンセン病院に入院する最初のときに、その病院の医者から、次のような懇切な長い手紙をもらった。(ここまではその一部を引用)

「キリスト者の信じるところによれば、人の幸福、不幸ということは、現在の状況だけでは論じることができない。このような比類なき困難、苦しみで生涯が終わるのなら、幸福とは、この世で栄華を尽くしたような恵まれた人だけがえることになる。キリストが十字架の苦しみ、恥を耐えて神の言葉に従ったのは、我らの従うべき模範である。」

の世の苦しみのかなたに、永遠の命の世界が約束されていることを示したのだった。

「神はその独り子をたまうほどに世を愛された。すべてイエスを信じる者が滅びることなく、永遠の命を得んためなり」(ヨハネ3の16)、

「すべて労する者、重荷を負う者は、我に来れ、われ汝らを休ません」(マタイ11の28)

玉木は、初めて受けるそうした愛のこもった手紙に関して、「私の胸は強く打たれました。暗がりのなかに一条の白い道を見いだした感じで、私の行くべき道はここより他にないと、新しい勇気が湧いてまいりました。

初めて知る聖書の言葉、上よりの光、救いの御手であつたからでございます。」と後に書いています。

母の愛、そして友人たちの友情などもみな力とはならず、

すべてが闇に沈んでいく恐ろしい孤独のなかで、神の言葉と、それを信じているキリスト者の医者励ましが、初めて光を与えたのだった。

聖書の巻頭に記されたこと、空しさと荒涼とした闇のなか、光あれ!との神の言葉によって、光が実際に現れたということとは、世界の無数のそうした闇にある人たちへの救いの道の宣言だったのである。

玉木はハンセン病院に入院したのち、だいたつてから、自分の思いを表現する道として俳句を知らされる。そこに、数々の自分の体験や感動などが凝縮して記されていくようになった。

○さへずりや この恩寵に窓樂し

盲目となって見るものすべてから遠ざけられたとき、窓際によって聞こえる小鳥のさ

えずりが、さまざまのことを  
思い起こさせ、神への賛美と  
聞こえ、自由に大空を飛ぶす  
がたに自分を重ねて希望を強  
めることにもつながった。

見える人には何の感動もな  
い、日常的なことであっても  
玉木にとっては、部屋にいな  
がら神から与えられた小鳥の  
自由な翼に思いをはせるひと  
ときとなった。

○あたたかや 見えざる聖手  
の大きいなる

神の愛の御手は見えない、  
しかしその愛のあたたかさは  
実感することができ。神の  
愛とはそうした全能ゆえにど  
のような状況にある人にも届  
いていく。

○信ずれば 天地のもの あ  
たたかし

神の愛を信じ、それゆえに  
罪の赦しを信じて受けるとき、  
そしてその全能を信じるとき、

目は見えず、狭い部屋にてし  
かも足さえ切断して歩けなく  
なっても、なお、天地のもの  
が暖かく感じるという。

最も人間の愛などから遠い、  
見放された状況にありつつ、  
なお、神の愛のあたたかさを  
実感させてくれるのが神の愛  
なのだ知らされる。

聖霊は、すべてのことを教  
えるとキリストは言われた。  
聖なる霊が注がれるとき、そ  
れは神の力そのものであるゆ  
えに、神の愛が何であるかも  
心身全体を通して知らせてく  
れるのがわかる。

○わが瞳 星にあづけて闇涼  
し

盲目となった作者は、天を  
恨み、運命を呪うことなく、  
瞳を星に預けたという。星の  
光は永遠であり、それは神の  
光を暗示するゆえ、神に預け  
たとの心とともに、かつて健  
康なときに見ていた星の輝き

が新たに自分の魂の目の輝き  
となつているのを感じさせる。

「心清き者は神を見る」  
(マタイ5の8)と言われて

いるように、神によって罪清  
められた者は、肉体の目が見  
えなくなっても、神を、霊の  
目で見る事ができるように  
なる。作者は、星を思い起こ  
すだけで、そこに神の光を感  
じて、闇さえも涼しげな心地  
よさを感じているのがうかが  
える。

このような、苦難をも超えた  
神の愛の力を感じさせる俳句  
を作るようになったのは、目  
を失ってからであった。俳句  
の先達から、「みずからの感  
情を燃やさなければ」と教示  
を受けたと言う。

心を燃やす―最もそのため  
に力あるのが、神の力である  
聖なる霊によって燃やされる  
ことである。

聖書に、「聖霊の火を消し

てはならない」(Iテサロニ  
ケ5の19)と言われている  
とおりである。

玉木は次のように書いている。

：心燃やされて俳句に向うよ  
うになって、それまでぼんや  
り見ていた自然界が「さまざ  
まの天は神の栄光を表し、大  
空はその御手のわざを示す。

この日ことばをかの日に伝え、  
この夜 知識をかの夜に送る」

(詩編19の1〜2)の聖書  
の言葉のように、いつそう主  
の御業をほめたたえねばやま  
なくなりました。(「真夜の祈  
り」玉木愛子著115頁) (\*)

(\*) こうした玉木愛子の俳句の作  
品は、戦前に岡山の内田正規(まさ  
のり)によってはじまった結核患者  
の祈りの集りである「午後三時祈の  
友会」の会報「清流」に毎号掲載さ  
れ、結核患者にも広く知られるよう  
になった。

その患者の一人であった大浜亮一  
(矢内原忠雄にキリスト教を学ぶ)  
が後に書店を開き、ここで引用した  
本もそこから発行されたものである。

現代の世界はどこを見ても、家庭や政治、社会の問題―差別やテロ、災害等々、暗い心になるよう

なことに満ちている。しかし、玉木愛子のようにどこから見ても光の全く見えない状況にあった人にも、神はその闇の背後に輝く光をしっかりと見て、天地に込められたあたたかさを感じとる道を与えられた。彼女の残された俳句などはその証しである。

そしてそのような光への道は、はるか数千年前から現代に至るまで、ずっと途絶えることなく続いている。私たちもただ信じるだけでその道を知らされ、その道は永遠のいのちへと続いていくのを実感させてくださる。

## メルケル首相の信仰

ドイツのメルケル首相は、今

年の5月30日、アメリカの代表的な大学の一つであるハーバード大学で講演した。

そのとき、無知や偏狭さの壁を打ち壊すべきことを、みずから東ドイツに育って、直接にベルリンの壁が大きな分断を示すものだった経験から、明確な言葉で語った。

また、単独でなく、共同での前進を訴え、一人で進んでも多くは成し遂げられない」と語った。

さらに、「嘘を真実と、あるいは真実を嘘と言わないように」と、トランプ大統領を名指しこそしなかったが、暗に直接的な批判をすることで、アメリカ大統領のやり方が、真実に反することを述べた。

このように、第二次世界大戦ご、70年という歳月を友好国としてともに歩んできた国の大統領に対して、その国の代表的な大学の卒業式において、お世辞を言ったりすることなく、はっきりと指摘すべ

きことを言ったのは異例のことであった。

日本の首相が、トランプ大統領の嘘やさまさまの独断的な政治、差別的言動等々に一切批判もせずにより寄っていくゆえに、トランプのポチだ、と揶揄される状態であるのは大きな違いである。

それは、メルケル首相のキリスト教信仰から来ている。彼女は、最近日本でも出版された「わたしの信仰」(\*)において次のように述べている。

(\*) 新教出版社 2018年刊、なお訳者の松永美穂氏は、早稲田大学教授、NHKの教育テレビで最近「100分」名著「シリーズ」の「アルプスの少女ハイジ」が放映された際の解説を担当し、そのテキスト本の著者でもある。

私はキリスト者です。キリスト者の出発点は、だれにとっても同じです。すなわち、神が人間を、私たち一人一人を造られたということです。そ

れによって、私たちには責任が伴いますが、同時に信じたいほどのさまさまの守りをも与えられているのです。

私たちは聖書を読んで、人間がとても早い時期に罪を犯したことを知っています。

人間が過ちを犯すこと、しかし、その過ちによって捨てられるのではなく、過ちにもかかわらず神に受け入れられていることは、私に大いに平安を与えてくれます。

私にとって自由とは、キリスト教的メッセージの一番最初に来るのです。神は私たち人間を自由な存在として創られました。

パウロは次のように言っています。

「あなた方は自由のために召されたのです」(ガラテヤ書5の13)

また、次のようにも述べて、ご自身が人間に自由を与えることを強調しています。

…主は聖霊であり、聖霊が主であるところには自由がある。

(Ⅱコリント3の17)

自由と信仰は互いに密接な関係にあります。

ルターの最も重要な文書の一つ、「キリスト者の自由」を思いだすべきなのです。

…ドイツの連邦議会には、非常に多くのキリスト者の議員がいます。私たちは、しばしば意見が一致しませんが、だからといってほかの人を「悪いキリスト者だ」とか「よいキリスト者だ」と決めつけるような人はいません。

キリスト教信仰の安心できるところは、全員が同じ結果を期待されていないところです。神は私たちを違う人間に創られたのですから、いろいろな問題に対して、同じ答えにならない、ということ、本当らし

くないことです。違いがあるからこそ、人生も興味深くなるのです。

あらゆる問題、毎日絶望してもおかしくないような問題にもかかわらず、キリスト教信仰は、私たちに、明るく生きる能力も与えてくれるのです。毎日成し遂げられている多くのことについて、「私たちにたくさんの方が動かせたのだ」と言ってもよいでしょう。

25年前の、東ドイツでのデモを思い起こせば、教会で行なわれたこと、祈りやろうそく、変化を呼び起こした平和的な手段を思い出すなら、私たちドイツ人は、物事を良くする力について、たくさんのごことを語れるでしょう。

私たちは、キリスト者としてもそのことを発言していくべきなのです。(「私の信仰」85頁〜92頁より)

メルケル首相の率いる政党、CDU(\*)は、福島原発の重大事故後、驚くほどのはやさで、原発停止を決定した。(\*\*)それは重大事故からわずか4カ月後であった。それほどすみやかに原発廃止の方針を決定できた重要な理由の一つに、キリスト教信仰にたつて考える人たちが多かったことがあげられている。

日本はあれほどの世界歴史で最大の原発事故であり、8年を経過した現在においても、放射性廃棄物、汚染水、避難所や生活の分断、郷里の喪失等々、いつまで続くかだれもわからない深刻な問題をかかえているにもかかわらず、外国に原発を輸出することに政府も原発メーカーもともに力を注ぐという驚くべき方針をとってきたのと何と大きな違いであろう。

自分の国の重大事故の対応にさんざん悩まされていて、放

射性廃棄物の処分など解決の道筋も立たない状況であるにもかかわらず、外国に輸出しようとする、そこで重大事故が生じたらどうしようというのかーそんなことは子供が考えてもわかるようなことであるにもかかわらず、推進しようとする懸念であった。

それは、目先の利益、ことに自分たちの政権の保持、自分の会社のもうけのためといった極めて狭い考え方から来ている。

このようなメルケル政権であるが、難民問題において新たな困難に直面している。困窮している人々により多くの配慮をーとの方針に反対の人たちが増大しつつあるということである。

それは、難民として入り込む人たちのうちに、テロリストが混入して都会での爆破をやつて多くの人たちを殺傷するという新たな事態をいかに

対処するか、それらの人々を排除せよ、という人たちの考え方が影響力を増しているのである。

キリスト教に由来する考え方は真理でありながら、時として受け入れられずかえって強い拒否反応を受けることは、すでにキリストご自身がそうであったし、弟子たちもユダヤ人や後にローマ人からも迫害され苦しめられて殉教していく者も生じた。

しかし、そうした困難のなかでも、キリストの真理それ自体はいささかも揺るぐことなく伝えられ、続いてきたのである。

政治という最も欺きや中傷、権力やカネの力の横行する場において、キリスト教信仰を維持し、それを公の場で公言するということの困難は相当なものである。

それにもかかわらず、メルケル首相は、従来のどのドイツの首相にも増して―とくに近

年は、キリスト教信仰のことをはっきりと述べるが増えたという。

物理学の博士号を取得し、研究者として出発したが、父親が熱心な東ドイツ時代からの牧師であり、ベルリンの壁の分断の状態を目の当たりにしつつ育ったが、ついにそれが崩壊するのをも経験し、その後のドイツの大きな変化をも直接に体験してきた。

こうした歴史のなかの特別な経験によって、現実には次々と生じてくる困難な問題に対しても、神への信仰によって考え、うながされて決断してきたのがうかがえる。

私たちは、政治家に関して、どれほど経済成長をなしたか、党員をどれほど増やしたか、とか戦前のように、いかに戦争をたくみに闘ったのか、領土をいかにして拡張してきたか、等々といった目で見るものを根本として考えるのではなく、目で見えない真理に、あるいはいかに

真理をまず求めようとする精神でなされているか、を重視するようでありたい。

(\*) ドイツキリスト教民主同盟  
Christlich-Demokratische Union Deutschlands の略称

(\*\*) 福島の大事故からわずか4カ月後の2012年7月8日に、すべての原発を廃止するための法律を、議会で可決させたのだ。福島原発事故の直前、ドイツには17基の原子炉があった。メルケル政権は福島原発事故が起きた4日後に、「原子力の停止」を発令し、1980年以前に運転を始めた7基を直ちに停止させた。この7基と、トラブルで止まっていた1基は廃炉になり、残りの9基も2022年12月31日までに順次止めていくことを決定した。

### 正義の支配―詩篇第72編

神よ、あなたによる公正を、

王に (\*)

あなたの正義を、 (\*\*)

王が正しくあなたの民の訴えを取り上げ  
あなたの苦しむ人々を裁きますように。 (\*\*)

この詩篇72篇の冒頭の部分は、神の正義が王に、そして王の子供にも与えてください、との願いからはじまっている。主イエスが、「まず神の国と神の義を求めよ」と言われた精神と共通しているのがわかる。

いつの時代にも、政治においては、偽りが満ちている。戦前の日本でも、そもそも太平洋戦争への導火線となった満州事変も、日本の軍隊の一部の者の策動によって南満州鉄道爆破をおこなっておきながら、中国側の仕業であると偽り、中国への武力攻撃をはじめたことがきっかけとなっている。

それから、中国での戦争は広大な中国全土へと拡大し、長期化し、英米などとの全面的

な戦争へと突入していくことになった。そして一千万以上とも言われる中国や東アジアの人々の命を奪い、日本も300万人ほどの人たちが死ぬ大規模な戦争となった。

このように、政治の世界における嘘は、広大な領域にわたっての戦争につながり、無数の人たちの命を奪い、さらに大怪我など、生涯を破壊された人たちが、その家族の人たちの果てのない悲しみと苦しみを生み出していった。

それは、第二次世界大戦のものになったヒトラーの独裁も、国会議事堂が炎上したことを、みずからの仕業でありながら、共産党がたくらんだと偽りを公言して一斉に暴力的な制圧から逮捕、そしてみずからの政党が多数を占めるように策動し、全面的にドイツの支配権を奪い取り、そこから1939年にポーランドに突然攻撃をはじめて第二次世界大戦

が始まったのであった。

このように、歴史を見ても、政治家の公然たる嘘、不正がいかに重大な結果をもたらすかが明らかである。

そうした観点から、この詩編は第二巻の最後に置かれているが、そのなかで、一貫して支配する者、王の正義を強く願い、神からその正義が与えられるようにと祈り願っている。

そして、その正義とは、一節に、正義によつて民の訴えを取り上げ、苦しみ、圧迫されている人たちを公正にさばくようにという言葉が続いている。

政治とは、金持ち、資産家を優遇したり、まず軍備に、そしてオリンピックなど、大企業の大額収入につながる事業に多額の予算を注ぎ込み、災害などで苦しむ人々への配慮を後回しにするのは、本末転倒であることを、はやく

もこの詩編はいまから数千年も昔から指し示しているのである。

正義とは、苦しむ者、弱者への視点を重視することである。これは神のご意志であるゆえに、このことに背いて政治をなすときには、必ず裁きが生じる。最終的にはそのような政治を行なっていくとする勢力は滅びていく。

この詩編の最初の、王と王子に正義を求める祈りと願いそれは、古くから霊的な王であるメシアと、その霊的な子であるメシアを信じている人々への願いが含まれているというのとは暗示的である。

72編は、一見して気付くことであるが、「王」という言葉が10数回も使われている。現代の私たちには王といつても子供向けの物語などでしか出てこない。

それゆえ、このような詩は、

表面的に読んで、現代の私たちには関係のないような内容と思ってしまうことが多い。

詩篇の大きな区切りで、第2巻の終わりとなつていいる。詩篇全体が祈りであつて、72編もダビデの祈りの終わりである。第73編から89編まででまた新しい区切りになっている。詩篇は第4巻まであり、その区切りごとにアームとある。

この詩篇72編には、多くの詩篇に見られる個人の喜びや叫びは全くなく、王という言葉が10回余りもあらわれる。

この当時の王は神の僕であり、その王が悪ければその民にも災いが降りかかってくる。王が神を裏切ったり、王自身が自分の利得に支配されたら、民全体も崩れていく。

だからここでは王だけではなく、王の支配下になる民全体の幸いを願うがゆえに、最後

にその上に立つ王に祝福を願っている。いまから三千年ほども前の古い時代に書かれたものであるが、支配者に対してどんなことを願っていたということがわかる。

：王が民を、この貧しい人々を治め

乏しい人の子らを救い  
虐げる者を砕きますように。

(4節)

2から4節はそれらを具体的に言っている。貧しい人を裁くというのは、公正に扱うということである。こんな古い時代から、貧しく弱い人たちを見つめるということが言われてきた。一般の支配者はこれとは逆になり、弱い人たちを踏みつけて、搾取してきた。貧しいというのは、苦しい人、圧迫されている人を指す。

このことは、この詩の終わりの部分にも再度強調されている。

る。

：弱い人、乏しい人を憐れみ  
乏しい人の命を救い

王の目に彼らの命が貴いものとされますように。(13〜14節より)

この詩の作者は、次の文に見られるように、周囲の自然に對しても、我々の通常の詩人や作家などの見方よりはるかに深い観点から見ている。イザヤ書や詩編などには、そうした霊的な深い見方があちこちで見られる。

そうした文書の作者たちが啓示を受けて、自然を創造し、支えている神の姿を自然の背後にはつきりと見ていたのをおうかがうことができる。

：山々が民に平和をもたらし  
丘が恵みをもたらしますように。(3節)

一般的には、平和をもたら

すのは、メシアとか王であり、世俗的には、特別な権力、軍事力を持つ人間とか団体などを考えるであろう。

しかし、ここでは、意外にも山々が平和、恵みをもたらすようにと祈っているのである。それはなぜなのか。

山と丘は揺るぎがなく、神が創られたものである。山々が静けさを保ち、大地に良きものをもたらす。

「私は山に向かって目を上げる。

わが救いはどこから来るか。

山々をつくられた神から来る。」(詩篇121より)

この有名な詩は、遠くにそびえる山々を見て、ただ単に美しいと思うのではなく、その静けさ、不動の力を見ることから、背後におられる創造主たる神にこそ救いがあるという確信が示されている。

山は、その堂々たる姿、雪をいただいた高き峯―それは

見つめる人間に汚れた地上とは別世界を指し示す。その高く清い姿の背後に、神がおられ、神がそうした清く厳粛な世界を高き山々の背後に感じさせるようにしているのだ。

山々や丘の背後におられる神が、民にシャーローム(「平和」と訳されるが、完成され、満ち足りた状態)と、罪の赦しや悪の力への勝利など、さまざまの恵みを与えてくださるように―という願いである。

自然の姿を見て、この世界への神の御支配があるようにというより深い視点で自然を見つめているのが感じられる。

：王が太陽と共に永らえ月のある限り、

代々に永らえますように。：王が海から海まで

大河から地の果てまで 支配しますように。(5、8節)

すべての王が彼の前にひれ伏

し  
すべての国が彼に仕えますよ  
うに。

王が助けを求めて叫ぶ苦しむ  
人を、

助けるものもない貧しい人を  
救いますように。(11、12節)

この詩における「王」とは、  
メシアを指し示すという受け  
止め方は、古代からあった。  
確かに、王が、太陽や月のよ  
うに、永遠であるようにーと  
いう願いは、王を単なる人間  
と解しては不可解である。人  
間は、太陽などの天体の寿命  
に比べるなら、わずか70年、  
80年ほどにしかならないゆ  
え、一瞬のようなものだから  
である。

この詩に記されている王と  
は、はるか未来に現れる神の  
子である。それは、深い祈り  
の中で啓示として示された。

そして実際に、この詩に名前

が現れるソロモンとかダビデ  
の時代より、千年ほど後の  
時代にキリストが現れ、その  
霊的な王としての存在が、歴

史に永遠に刻まれ、その死の  
ときに、ローマ総督のピラト

が「お前は王なのか」との間  
いかけに對して、あなたが言

うとおりでと答えられた。そ  
して、その十字架に付けた罪

状書には、「ユダヤ人の王」  
と、ヘブル語とギリシャ語、

ラテン語で書かせた。それは、  
この三つの言語は、世界の哲

学や信仰の世界に決定的な影  
響を与えることをヨハネは啓

示されていたので、全世界に  
伝わっていくということがピ

ラト自身はそれほどの重大性  
があるとは認識しないままに、

いわば背後の見えざる神の御  
手によってそのような罪状書

を書いたのだった。

キリストこそが王の中の王な  
のである。

：王が牧場に降る雨となり、  
地をうるおす豊かな雨となり  
ますように。(6節)

6節の表現も他にはないよう  
な表現で、これも最終的には

王なるキリストが霊なる雨を  
降らせることを指し示すもの

となっている。

私たちもキリストから霊の雨  
を注いでもらうことによつて、

人々の心の牧場にわずかでは  
あつても、小さな雨を、霧雨

のようなものであつても降ら  
せることができるようになる。

キリストに結びついた人も、  
復活ののちには、確かに太陽

以上に、永遠にイエスと同じ  
ような栄光を頂けると聖書に

も記されている。(フィリピ書<sup>3</sup>  
の21)

：王が命を得て、  
シエバの黄金がささげられま

すように。

彼のために人々が常に祈り絶

え間なく彼を祝福しますよう  
に。

この地には、一面に麦が育  
ち山々の頂にまで波打ち茂  
りますように。(15、16節)

15節にあるように、アラビ  
アにある良きものーシエバの

黄金がささげられますように  
とある。ソロモンの時代に、

シエバという遠い地の女王が、  
ソロモンの英知を聞いて、そ

の英知を受けたいと黄金をもつ  
てはるばるとやってきたと記

されている。

キリストが生まれた時にも、  
東方の博士たちがきて、ささ

げものをささげたともあるが、  
この詩篇の言葉は、こうした

出来事をも預言的に述べてい  
るのである。(マタイ二・10)

このささげものとは、今の私  
たちで言えば、心の中が一番

大事なものー砕けた心にある  
心の真実や愛をキリストにさ

さげるといふことである。

10節にある言葉「タルシユシユは、当時の世界の果てであり、はるか全世界からこの王に心からのささげものをささげるようになる」ということをはるかに預言している。

現代において世界のほとんどあらゆる国々にあつて、キリストに真実な心をささげる礼拝が行なわれていることが思いだされる。

キリストの栄光がたたえられ、祝福、賛美されるようにとの祈りが続けられている。

16節には具体的な産業と、それへの祈りがある。どの国でも、まず経済。経済ということではなく、まず成績。

現代の世の中では、最も大切なこと以外のこと、全面的に最重要なことであるかのよう

に扱われている。しかし、聖書は全く違う。まず正しいことを求めていく。それを無視していくなら、必

ず全体が崩れていくと警告している。

国家全体がよくなるためには、上に立つ指導者、古代では王が神による正義の裁きを行い、そうして初めてその王の権威は、永遠となる。その王が死んでも、その精神は永遠に続く。

そして、そのような心は、王でなくとも、だれにおいても、ヨハネ福音書で言われているように、いのちの水でうるおされ、豊かに実を結ぶ。そこではぶどうの実が用いられているが、この詩では、小麦の実りが一面に、山々のいただきにまで波うつように豊かとなる。

ここには、キリストの聖霊に満たされた魂の世界が、ゆたかな詩情によつて描写されている。

…主なる神をたたえよ

ただひとり驚くべき御業を

行う方を。

栄光に輝く御名をとこしえにたたえよ 栄光は全地を満たす。アーメン、アーメン。

(18～19節)

最後に、真に驚くべき業とは、ただ神のみがなさる。それゆえにあらゆる良きことー栄光に満ちている神だけをたたえよと呼びかけられている。

そして、それは、現代に至るまで数千年を経てのそれこそが、人間の究極的なあり方であることを示し続けている。

霊の目を開かれるほどに、悪が世界を支配しているのではなく、神の栄光こそが、全地を満たしていることを示される。

アーメンというヘブル語は、「真実」というのが本来の意味であり、ここでは、よく言われるように「誰かが祈ったことと同じことを祈ります」というのでなく、主イエスが重要なことを言うときに、

「アーメン、アーメン」といわれたと同様に、「真実を言う」ということであり、ここまで述べてきたことは、みな真実なのだ、真実なのだ！という強い強調をもつて終えているのである。

\* 公正と訳された原語(ヘブル語)は、ミシユパート *mišpat*

この語は、次のような多くの言葉に訳されている。裁き(75回)、公平(20回)、公正(7回)、正義(3回)、公義(24回)、審判、裁判、定め、命令、行動、定め等々。このように、これらに共通している本質的な意味は、「正しいこと、正義」ということである。裁きを行なう という文も、正義を行なう という意味を含んでいるのがうかがえるのであつて、訳者により、聖書訳も当然さまざまに訳語が用いられている。

詩篇では、この語と並行して「正義」(原語は、ツェダーカー)あるいは「セダーカー」とも表記)という語が数多く用いられる。詩であるからなるべく同じ言葉を繰り返し使わないために、正義とい

う言葉の代わりに、ミシユパートを使っていると考えられる。

(\*\*) この個所の新共同訳は、「恵みのみ業」と訳された。しかし、原語は、ツェダーカーで、本来は「正義」という意味であるから、外国語訳も大多数が正義を意味する語で訳されている。例えば、英訳では代表的なNIV NRS なども次のように、正義を表す justice、righteousness を用いつつる。

Give the king your justice, O God, and your righteousness to a king's son. (NRS)

新共同訳のこの詩篇の担当者が、おそらくは個人的な考えから、このような原語の本来の意味からは異なる訳語を選んだのではないかと推察される。「恵みのみ業」という言葉で、どんなことをこの日本語から連想するであろう。健康も、よい仕事、恵まれた結婚、豊かな収入が与えられていること：等々も神様の恵みによる業であると言えようし、周囲の雨やよき花々、夜空の星々、風など：そうした自然も神の恵みのみ業ということが

できる。

しかし、この原語の、ツェダーカーは、「正しい、正義」というのが根底にあるのであつて、個人的な健康とか美しい自然等々を意味することではない。

この原語を新共同訳のように「恵みのみ業」のように訳するときには、本来の「正義」というニュアンスが失われ、聖書全体を貫く正義ということが見えなくなつてくる。

私は、聖書講話のおり、詩篇などで「恵みのみ業」という訳語が出てくるたびに、この本来の意味は、そうでなく「正義」であり、公正とか公平と訳される ミシユパート と本質的には同じ内容を持った言葉であることを語ってきたので、今回の聖書協会共同訳において、「正義」と訳語が変更されたのは、こうした原語の知識を持たない大多数の人たちのためにもよかつたと思う。

(\*\*\*) 新共同訳は、「貧しい人々」と訳しているが原語のアーニイ、それとほぼ同じ意味であるアナー

ウィーム はいずれも、もともとの意味は、アーナウ(圧迫する press)である。そして貧しい人々といえ、経済的な側面だけを思わせる。例えば、現代の日本人は、貧しい国民とは到底言えないであろう。

三度の食事ともに食べられず、飢餓状態といえる人々は世界では、8億2100万人に達するという。(国連の報告書 2018年9月)それは世界の人口の9人に一人は飢えているということになる。

貧しさは権力やテロなど何らかのものによつて圧迫されているから、貧しいという訳もあてはまる。しかし、日本はそれらの国々と比べると全く貧しいとは到底言えないのはただちにわかる。

しかし、その世界的に見れば豊かな国であつても一貧しくなくとも、苦しむ人々、圧迫されている人たちは、数知れない。それは病気やからだの障がい、あるいは家族、学校、職場などにおける人からの圧迫、言葉の暴力等々、また差別、侮辱、あるいは敵対関係、憎しみ、等々によつて苦しむ人はいくらでもいる。

それゆえ、圧迫された人たち、苦しむ人たちという訳語がより原語のニュアンスを表しているといえよう。このようなことから、新しい聖書協会共同訳では、「苦しむ人」と訳している。

### 「いのちの水」誌 700号に寄せて

(その2)

700号記念号作成は、いろいろな事情からどうしても編集、校正の時間がとれず、掲載するべき原稿が入っていないまま印刷所に出さねばならなくなりました。

そのなかに、700号記念誌に寄せて送っていた原稿も未掲載のままになったものがありました。それで申し訳ないことですが、今月号にその一部の原稿をも、700号記念号に掲載予定の原稿とともにここに掲載させていただきます。 (吉村)

## 出会い

ー700号記念誌に寄せて

伊藤 玉恵(横浜市)

「いのちの水」誌には、毎号、神の愛、イエス・キリストの恵み、聖霊のはたらきにつき、いろいろな角度からわかりやすく記されていて、靈的に豊にされ、感謝しています。

旧約聖書の世界、文学的なことには、原文や、注釈なども、添えられ、自然界のことも、広く教えられています。特別に教会歴には、ていねいに説明されていますので、教会で回覧したり、プレゼント用に南部かおねがいすることもあります。

巻末には、夜空のことも記されていて、楽しく夜空を眺めています。

風のささやき、草木のことなど、今の現実の社会から目をあげて、創造主に思いを馳せるよう導かれたりと、多方面から恵みをいただき感謝して

います。

毎月これだけのことを準備さ

れることの御労の大きさと、ご協力管咲く皆さまの御愛に深く感謝しています。

主よりのお報いがお一人一人に十分にありまますようにお祈り申し上げます。

この「いのちの水」誌との出会いは、2011年3月11日、東日本大震災、原発事故のとき、一人の姉妹から「原子力発電と平和」の本を紹介されてからです。

また、「祈りの友」にも加えられ、祈られ 祈るお互いとなり、この世の闇の深さも知ることができました。

遠大な神様の御計画のうちにある出会いにと主をあがめています。

これからも、「いのちの水」誌が人々の中に流れ続け、人々の救いと靈的な成長のために用いられますように、心からお祈り申し上げます。

「いのちの水」誌 700号

出崎 優美(岐阜県)

いままで、自分のささやかな日常生活や教会生活において理不尽な要求や報われない待遇など根本的な疑問を抱かざるを得ない場面に遭遇したり小さなつまづきによって生じる外界との差に過敏に反応して内向きに考え込むことをしばしば体験してきました。

でも、いろいろな思いに困惑しながらも導き出した結論として一人ひとりの信仰が深くなるためには個別に与えられる苦難がとて影響するのだということでした。

キリスト教以外の宗教においても 修行や瞑想などによって統制された自我にめざめる域にまで達することがあるかもしれないませんが最終的には人間を超えた「Something Great」に身をゆだねるほかはないと

わかるのではないのでしょうか。

私が60代になった今過去を振り返ってみると乗り越えてきたというよりも ひたすら歩んできただけという気がするのですが苦しみや嘆きや深い悲しみというのはどんな場合でも「死」ではなく「生」に対する条件を自覚するきっかけではないのかと思えるようになりました。

それが聖書を通して得た私自身の信仰の核となっています。イエスさまは「明日のことまで思い悩むな。その日の苦勞は、その日だけで十分である」と語ってくださいました。

だから何度も何度もこの御言葉を繰り返しつつ生きていくように思います。

そして「敗北と勝利とを、お前自身が区別してはならぬ」というパステルナークの言葉も励みにしながら大きな御手の中で安心したいと思います。

これからも続いていく「いのちの水」誌を通してますます神さまの栄光を現すことができますようにお祈りいたします。

## 「いのちの水」誌で心に残った文

竹下 八千代 (京都市)

(中途失明者)

聖書とは、その全体を通して、そこには目が開かれた人のこと、そこで与えられた真理が記されている書物だと言える。

人はいつ、目が開かれるかはわからない。神は何をそのために用いられるかわからない。だから、あきらめることはない。

もう、ダメだ、ということもない。私たち自身が絶望的な状況に陥ったとしても、そこで目が開かれ、神の大きいなる助けに接することもある。また、祈り続けている相手が、

いつ目が開かれるかはだれにもわからないが、神の御心になつたときには、およそ信仰など持たないと公言していた人でも、突然信じるようになる。

そして、ここでエリシャも祈りによって、目が開かれたことが記されている。二人三人、ともに祈るときにイエスはいてくださる。しかし、油断をしていると、目が開かれなくなる。また、あの人は目が開かれまいだろうと他者を裁くとき、自分の目が見えなくなってくる。

わたしたちも何が起るかわからない。そして、さまざまな問題を今も抱えている。しかし、はるか数千年前から、どのような敵が来ても、霊の目が開かれるなら「火の戦車を取り巻いていた」と記されているように、いかなる問題が起こつても、そこに神の力が取り巻き、守ってください

ていることを信じて歩ませていただきたい。

「信なくは立たず」これは、古代中国の哲人(孔子)の言葉であるが、現代の私たちの日々の生活もこのひと言は真理であり続けている。

## 出合いの不思議

森久恵 (徳島県)

「いのちの水」誌2004年8月号の「出合いの不思議」という文を読んで、私も同じ思いを持ちました。

貧しい両親のもとに8人もの子供の中の一人に生まれました。ミルクもなく、乳も出ないため、米のとき汁を飲んでいたのでのこと。私はいろんな苦しみ悲しみ、憎しみあり、神様なんかいるものか、何が神様に感謝だーなどと思っていました。

けれど、自分がそんな境遇だったため、小さいひと、弱いひと

とを見ると助けたくなくなる、でも私の力などまったく取るに足らないもの。

でも、これでもかこれでもか、という苦しみ、悲しみの中を通つていまの私がある。この中の一つでも欠けていたらまたちがった自分、ちがった人生だっただろう。

高校時代に、吉村先生に出会い、キリストに出会い、信仰によって新たに兄弟姉妹といえる人たちに出会い、絶望せずには生かされてきたと思う。

小さいときだれに、どうして、なぜ、誰に教えてもらったのか、一人テントの中で聖書に関する話を聞いて、人さまの家に上がり、話しを聞いていたことを覚えていきます。でもそんなことずっと気にも留めなかつたけれど、吉村先生に出会って聖書を学んでいる間に思い出した。不思議にはつきりと覚えている。ずっと後になってそのときの

話が、キリスト教に関する話  
 して、旧約聖書のヨブのこと  
 についての話だったのだとわ  
 かった。

その後 長い時間かけていろ  
 んな道を歩いて、吉村先生に、  
 そしてキリストに、兄弟姉妹  
 に結びつきました。

8人兄弟姉妹のなかで、私一  
 人救われました。 まだまだい  
 るんな中でさまよっているよ  
 うな私ですが、たくさんのひ  
 とに、それも本当にいい人ば  
 かりに守られ、励まされて支  
 えられて自分が少しでもまわ  
 りの人のわずかでも役に立つ  
 ことができています。 本当に  
 不思議です。

人生で一番大切なものが与え  
 られました。

## 「いのちの水」誌

700号によせて

綱野悦子(中途失明者)

「はこぶね」から「いのち

の水」へと700号の今に至つ  
 ての恵みを思うと主の霊に導  
 かれ支えられたことを思い主  
 に感謝します。

私が1977年に徳島聖書キ  
 リスト集會に導かれてからし  
 ばらくして点字の「はこぶね」  
 を手渡されて読み始めました。

柚友豊市、吉村孝雄両氏が執  
 筆されていましたが、その頃  
 に、韓国の安利淑著の「たと  
 えそうでなくても」の内容の  
 一部が、柚友さんによつて毎  
 月連載されていきました。

まだ聖書を学び始めたばかり  
 だったので難しいことはわか  
 らないままでしたが、イエス  
 様に祈りみ言葉に信頼しゆだ  
 ねて生きる信仰と希望の確信  
 を知らされました。

私は戦前の日本統治下での朝  
 鮮のキリスト者がどれほどの  
 迫害を受けていたかをそれを  
 読んで初めて知らされました。  
 どんなに拷問を受けても、主

への祈りと聖書のみ言葉が常  
 に心にあり、それによつて驚  
 くべき守りと力をいただいた  
 希望を持って忍耐していたこ  
 とを知らされました。

柚友さんは、その紹介文の中  
 で「どんなに取り去ろうとし  
 ても心の中にたくわえたみ言  
 葉とイエス様への祈りは取り  
 去ることができない」と書い  
 てありました。

毎月の連載が待てずにこの本  
 の朗読テープを図書館からか  
 りて聞きました。

この「たとえそうでなくても」  
 はダニエル書の3章18節の  
 み言葉からのものでした。

私もみ言葉を心にたくわえて  
 いこう。点字の聖書を持ち運  
 ぶことなんてできないのだけ  
 らとこの頃にロマ書を暗唱し  
 ようと思いました。

私がそんなことを想っている  
 と柚友さんに話したらノート  
 に書き留めてくださいました。  
 その後私の体調が悪くなり途

中で挫折してしまいました。が、  
 今も深く心に残っています。

私が「いのちの水」を読ま  
 せてもらっていて思うのは、  
 主の霊に導かれてのみ言葉の  
 説きあかしは日々力を与えら  
 れる恵みでしたが、短いけれ  
 ど自然のなかに神様の声をき  
 くような文にも心清められ深  
 められています。

私のように視力を失ったもの  
 でも野草や星や自然の中にお  
 られる神様のことを書いてく  
 ださり心の世界を広げてくだ  
 さる気がしてうれしく読ませ  
 ていただいています。

これから一人でも読んでく  
 ださる方が広がり、み言葉の  
 力、祈りをこめて書かれてい  
 るこの「いのちの水」によつ  
 て十字架のイエス様の愛と聖  
 霊が心にあふれ流れていきま  
 すようにと願います。

「いのちの水」は点字の印刷物  
 からカセットテープになり、現在  
 はCDで聞くことができ、またパソ  
 コンのできる方はテキストファイ

ルで読めるようになっていきます。)

## 「いのちの水」誌

### 700号に寄せて

石川光子・石川正晴(徳島市)

古本屋で立ち読みをした一冊の本で神さまに招かれ、使命を与えられ、それから信仰ひと筋に歩んでこられた吉村さん。

まだ私達が三十代の頃、初めて礼拝をされている柚友さんの所へお伺いした時は吉村さんもお話されていて、集会員の数も十人に満たなかったと思います。

柚友さんはいつも温厚な笑顔で、朗々と神さまのお話をされています。

「はこ舟」誌の原稿を書いておられるのを見かけた事もありません。

吉村さん、柚友さんと共同で書かれ、そのあと「いのちの水」となり、吉村さんが一人

でも多くの人に神さまを知って頂きたいという思いと祈りで七〇〇号まで休むことなく執筆され、全国各地に発送されておられるのは、私達にとつては大きな恵みであり感謝です。

「いのちの水」誌には巻頭にすつと入る文章にはじまり、聖書からのメッセージを原語を通して、より深く掘り下げ、真実に近いものへと導いて下さいます。

また、神さまが創造された自然、宇宙等も詳しく掲載され、ある時は時事問題など、みことばを通して語って下さったり、私達の知らなかった事、解らなかつた事も解説され教えて下さいます。

礼拝に伝道にと、お忙しい中を今まで続けてこられたのも、神さまのお守りと祈りがあつてのことと思われまふ。

どうぞこれからもご自愛の上に、この「いのちの水」誌が

祝福され用いられますように。

いのちの水 全てうるおし  
涸れることなし

## 「いのちの水」誌

### 700号

内藤静代(徳島市)

今年6月の「いのちの水」誌が700号を迎えることを知り、愛の父なる神様と、救い主イエス・キリスト様に心からの感謝と喜びを捧げます。

1956年4月の創刊号を発売された太田米穂、その後受け継いだ柚友豊市両氏とそれを継続された吉村孝雄様の御愛労がいかに大きなものであつたかを驚くばかりです。

「本当にありがとうございました」と申し上げるより他の言葉がありません。

昔から人生50年という言葉があります、私はちょうど50歳のころに、不思議ないきさつで、柚友さんの家庭集會に導

かれて、来年は米寿となる現在までお世話になっておりますが、私の人生にとってこのことが唯一の正しい選択であつたことをつくづく思います。

それにもかかわらず、今も信仰的には進歩もなく、申し訳ない状態が続いておりますが、どうか最後まで、徳島聖書キリスト集會の一員として、お導きくださいますように、吉村様はじめ、皆さまにお願い申し上げます。

## 「いのちの水」誌

### 700号

中川陽子(徳島県)

「はこ舟」誌が「いのちの水」誌に変わった時、これとてもいい名前だなあと思つたことを覚えています。「はこ舟」のタイトルも、そこにいつも描かれている小さな鳩の絵も大好きでした。そのタイトルには私たちが信仰によつ

てはこ舟に入れていただき、救っていただけるといふ安心感がありました。

「いのちの水」は、私たちクリスチャンの渇きを癒し、私たちがいつも求めてやまない聖霊様がタイトルとなっていて、その文章からは神様から流れてくる清らかな流れを感じています。

吉村さんはいつても社会的な事柄も聖書の視点を通して語られ、また身近な自然や古今東西のさまざまな文学から、神様の愛やご意志を汲み取り、鮮やかにそれを見せてくださいます。

その中でも特に印象的だったのが2018年の11月号でした。この号は吉村さんが定時制高校や工業高校、盲学校、ろう学校などで色々な問題に直面し、クリスト者としてどのように向き合い、神様のお力によって対応されて来られたかという証しでした。

その一つ一つが、驚くような大きな問題で、これを黙認せず、ご自身の保身ではなく、生徒さんたちのためにまっすぐに向かわれたお姿にとても感動しました。

今年3月に福音歌手の森祐理さんと音響の岡兼次郎さんが当集会主催のコンサートと翌日の主日礼拝に来られた際、お二人はこの号を持ち帰られました。4月のメロデー会(森祐理さんの後援会)の後で祐理さんにお会いした際には、開口一番「あの『いのちの水』誌 11月号の文章の内容は本当にすごい体験で、読んでびっくりするとともにとても感動しました。私のコンサートの後、吉村さんが『まっすぐに福音を語ってください』とありがとうございます」ということを言うてくださいましたが、そのお心の背景がよく分かりました。吉村さんに是非このことをお伝えください。」と託されました。

した。

吉村さんは神様のお導きに従って、教育界の中でも特に厳しい、難しいところを通過してこられたと思いますが、そこを乗り越えたからこそ、まるで砂漠に花が咲いていくように私の母をはじめたくさんの教え子の方々がキリストの福音に触れて信じ、今も集会の大切なメンバーであり、その家族にも福音、いのちの水が脈々と流れていっています。

吉村さんはその教育の仕事の最初から、神様の福音を伝えるということに全力を注いでおられました。わたしの家には母が高校を卒業するとき、新任で担任だった吉村さんが卒業生一人一人に贈られた内村鑑三の本があります。母に贈られたのは「基督信徒の慰め」でした。その背表紙の内側には、吉村さんの字で神様を伝える言葉が丁寧にびっしりと書き込まれています。

それを贈られたときには、母はまだ信仰を持っていなかったもので、その時の吉村さんには約50年後の今のこの集会の様子や、母やその家族と信仰の兄弟姉妹になつていくという状況は、想像もできなかったことだと思えます。

母は吉村さんに伝えられた言葉の数々がずっと胸にあつて、深く葛藤していました。結婚して子育てをしていたある日、突然「キリスト教の本を読みたいから買いに行く」と言つて小さかった私や弟を父に託して出かけたのです。

そしてその日に、その徳島駅前の大きい書店の前でぼつたり吉村さんと再会し、それから徳島聖書キリスト集会に通い始めました。この贈られた本とメッセージを見ると、20代の頃からこんなに伝道の姿勢を持ち、実行されていたのだと言うことに本当に驚きます。そしてその熱意を与え、

力を与えられた神様に感動します。

世界の中でも福音が語られることが圧倒的に少ないこの日本で、この「いのちの水」誌がこれからも用いられ、聖霊様がまた新たな人に影響を及ぼし、人々の渴きを潤していただくයිませすようにと祈ります。

### 「ハイジ」のなかから

アルプスの少女ハイジという名前は日本では子供たちにも、そして大人たちにも広く知られています。しかし、それは単なるかわいい、子供向けのアニメとしてであり、そこにキリスト教信仰が深く根付いているということはほとんど全く知られていません。著者のヨハンナ・スピリは熱心なキリスト者であって、その作品にも随所に著者のキリスト教信仰が現れています。ここ

では、「ハイジ」の中からそうした著者の信仰を表す箇所の一つをあげておきます。

(ハイジと友達になった、クララという少女を診ていた医者があった。その医者は、たった一人の娘があった。医者は、夫人を亡くしてからは、その娘がただ一つの慰めとなっていた。しかし、その娘も二、三ヶ月前にこの世を去ってしまったので、それから、その医者は、すっかり変わってしまった。医者は、フランクフルトの町にいるクララの父親から依頼されて、スイスの山にいるハイジのところに行くことになった。以下の引用は、ハイジの所に着いた医者のとの会話から)

「ほんとにいい景色ですね。だが、もし悲しい心をいだいてここへ来た人があるとすれば、どうしたらその人はこの美しい景色を楽しむことができ

るでしょう」

「そんなことないわ。だってここではだれも悲しくはないんですもの。悲しいのはフランクフルトだけなのよ」ハイジはさげびました。

医者はちよつとわらいましたが、すぐに笑顔になって言いました。

「だが、もし悲しみをすつかりフランクフルトにおいてこれならなかったら、そのときはどうしたらいいのでしょうかね」

「どうしたらいいかわからないときは、神様のところについてお話するといいわ」ハイジはきつぱりと答えました。

「なるほど、いい考えですね。しかし、悲しい目にあわせたのが神様自身だとしたら、そのときは神様になんと申しあげたらいいのでしょうかね」

ハイジは、神様はどんな悲しみからも救ってくれるものと思っていたので、しばらく考えこまざるを得ませんでした。

「そのときは待つのです。」

しばらくたつてからハイジはそう言いました。

「自分で自分にこう言い聞かせるの。」

神様はわたしたちを悲しみから必ず救い出してください、わたしたちはじつと忍耐して待つていなければいけないって。

そうすればきつと道が開けるわ。そして神様がいつも善い思いを持っておられたことがわかるようになるわ。わたしたちは、先のことからわからないものだから、自分たちはいつも不幸なのだと思ってしまうのよ」

「美しい信仰ですね。いつまでもその信仰をすてないでください」医者はそう言って、山々や谷間をながめながらじつとすわっていました。やがてまた言いました。

「だがね、目がかすんでしまつて、こんな美しいけしきを樂しむこともできず、その美しさを思うとますます心の悲しくなるような人もあるという

ことが、あなたにはわかりませんか」

ハイジは喜ばしい心のなかを弾丸で打ちぬかれたように思いました。

目がかすむと言ったのでおばあさんのことを思い出したのでです。おばあさんは、こへ連れてこられても美しい景色を見ることはできないにちがいない、それはハイジにとつていちばん悲しいことで、目の見えない暗やみのことを考えると、いつも悲しくなるのでした。

ハイジはせっかくの楽しい心が突然の悲しみによって妨げられてしまったので、ちよつとのあいだ何も言うことができませんでしたが、やかで重々しい声で言いました。

「わたしよくわかりますわ。でもおばあさんだって、すきな讃美歌を歌ってあげると、光がもどってきて、幸いな気持ちになれるって、おばあさんが言ってたわ」

「どんな歌？」

「わたしの知っているのは

『朝日の歌』です。全部ではないんですけど。おばあさんがいちばん好きなので、わたし何べんも読んで、歌ってあげました」

「そうですか。それじゃ、わたしにも歌って聞かせてください」

そう言って医者はずわりなおしました。ハイジは手を組

んでじつと考えていました。「おばあさんが、心がすがすがしくなるって言ってたところからはじめましょうか」

医者はうなずきました。ハイジは歌いはじめました。

さまたまの 悲しい思い  
時にあなたを 襲うとも、  
神はあなたを救う  
神こそは、心の支え

力ある神が敵に向かえば  
今しも敵は散りゆく  
そのゆえに、さまたまの苦しみ  
き出来事も

喜びの光に輝く

もしも、神の恵みが

しばしの間見えなくなり、  
苦しむ人たちを棄てるように  
見えるとも、

神の恵みを決して疑うな  
み恵みはとこしえに変わらな  
いゆえに。

苦しみを耐え、神を待ち望む  
者の

心の上に 大なる神の愛は輝く

ハイジは、医者が聞いていないのではないかと思つて急にやめました。医者は片手で目をおおつたまま、眠つていくようにじつとしていました。あたりはしんと静まり返っていました。

医者は遠い昔を思い出しているのです。まだ子供のころ、その母親が自分の頭を手をまわして今ハイジのうたった歌をうたってくれたのです。もう何年も聞いたことのない歌でした。医者には、昔聞いた母親の声が聞こえ、あ

やさしい目が自分の上に注がれているように思えたのでした。そしてハイジが歌いやめたときも、思いは遠いむかしに帰っていくのでした。

やがて我に帰ってみると、ハイジが不思議そうな顔をして見つめていました。

「ハイジ、ほんとにいい歌でしたね」医者の言葉には、喜ばしい響きがこもっていました。

「またいつかここへ来ましょう。そしたらまたこの歌を聞かせてください」

目の見えないおばあさんは、愛するハイジがフランクフルトに帰ってしまうのではと思つて、ますます心配になったのです。しかし、また讃美歌を読んでもらおうと思いつきました。

もろもろの 物は善からん  
神のみを 信じる者よ

翼もて 我は翔け行く  
汝をこそ われは救わん  
「そうそう、私の聞きたいと

思っていたのは、それだよ」  
こう言っておばあさんの顔か  
らは苦しみの色が消え去って  
いききました。ハイジはじつと  
おばあさんの顔を見つめて言  
いました。「神様が救うって、  
何もかも善くなることなんで  
しよう。おばあさん。」

「そうだよ」おばあさんは、  
うなづいて言いました。「な  
んでも神様の善きご意志でな  
いものはないんだよ。」  
ハイジは二、三度繰り返して  
読みました。ハイジにもすべ  
てのものが神様の善きご意志  
なのだと思おうと喜ばしくなる  
のでした。

夕方になってハイジは山を  
さして登って行きました。頭  
の上には、星がつぎつぎに輝  
きだし、胸のなかの喜びにま  
た新しい光を送ってくるよう  
な気がしました。ハイジは何

度も立ち止まって見上げない  
ではいられませんでした。と  
うとう空一面に星がいつぱい  
に輝きはじめたとき、ハイジ  
は大きな声で叫びました。  
「そうだよ、私たちがいつも  
幸いで、何も恐れることがな  
いのは、神様が私たちのため  
になることを何もかもして下  
さるからだわ!」

輝く星は、ハイジを見つめ  
る目のようで、その星に見送  
られて帰り着くとおじいさん  
も家の前で星を仰いでいまし  
た。:  
嵐の雲は覆うことがあるうとも  
天にいますあなたの父なる神は  
あなたに、内なる平安を与える  
神は、あなたを悩ますものは  
何もないようにして下さる  
もし、神があなたを守り、祝  
福されるなら、

永久(とわ)の喜びを  
あなたは勝ち取る  
Though the storm clouds gather,  
God thy Heav'nly Father  
Gives thee peace within.  
Nothing shall distress thee,  
If God keep and bless thee,  
Lasting joy thou'lt win.  
○主よ、われ今何をか待たん  
わが望みはなんじにあり  
(詩篇三九・8)ヨハンナ・スピリの  
墓碑に書かれた言葉

で重荷を負っている方々のと  
ころに主の力がのぞみますよ  
うに。

徳島聖書キリスト集会所案内  
・場所は、徳島市南田宮一丁目一の47  
徳島市バス東田宮下車徒歩四分。  
(一) 主日礼拝 毎日曜午前10時30分  
(二) 夕拝 第一、三火曜夜7時30  
分から。 毎月最後の火曜日の夕拝  
は移動夕拝で場所が変わります。(場  
所は、徳島市国府町のちのさと作業  
所、吉野川市鴨島町の中川宅、板野郡  
藍住町の奥住宅、徳島市城南町の熊井  
宅)です。

あとがき  
多くの方々からのお祈り、協  
力費、お手紙などありがとうございます。  
いろいろな事情から、返信を  
書くこともなかなかできない  
のでいますことをおゆるしく  
ださい。  
病氣その他のさまざまの問題

☆その他、第二水曜日午後一時からの  
集会所集會場にて。また家庭集會は、  
板野郡北島町の戸川宅(毎月第二月曜  
日午後一時より。第二水曜日夜七時  
三十分より)、海部郡海陽町の讚美堂・  
数度宅(第二火曜日午前10時より)、徳  
島市国府町(毎月第一三木曜日午後七  
時三十分より)「いのちのさと」作業所、  
板野郡藍住町美容サロン・ルカ(笠  
原宅)、徳島市応神町の天室堂(網野  
宅)、徳島市庄町の鈴木ハリ治療院な  
どで行われています。

著者・発行人 吉村孝雄 〒七七三〇〇一五 小松島市中田町字西山九一の一四 電話 080-6284-3712 固定電話 (FAX兼用) 0885-32-3017  
「いのちの水」は自由協力費です。郵便振替口座 〇一六三〇一五―五五九〇四 加入者名 徳島聖書キリスト集會 協力費は、郵便振替口座か定額小為替、ま  
たは200円以内の未使用の切手なら古いものでも結構です。 E-mail: emuna@acc.ocn.ne.jp http://pistis.jp (「徳島聖書キリスト集會」で検索)